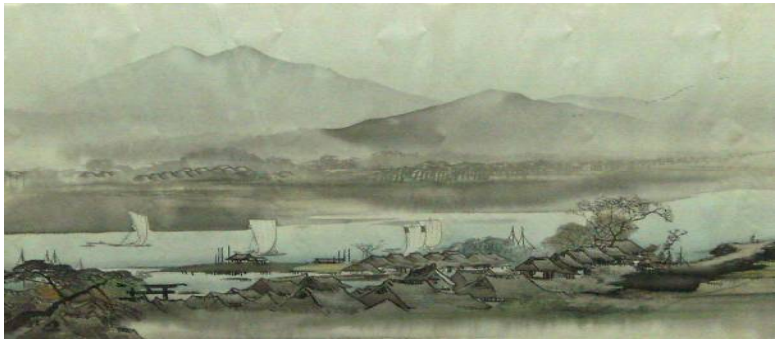
木下（きおろし）・六軒を元気にしたい！

――小さなまちづくり市民団体の 10 年――



真野暁亭（1874～1934）
「下利根川木下河岸眺望図」

木下まち育て塾

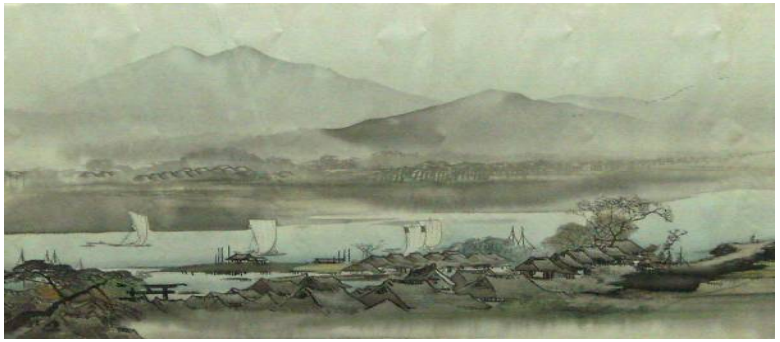
千葉県印西市　木下・六軒地区

応募概要書

まちづくり活動の名称等 まちづくり活動のテーマやキャッチフレーズなどがあれば記入して下さい	木下（きおろし）・六軒を元気にしたい！ ――小さなまちづくり市民団体の10年――
まちづくり活動の概要 まちづくり活動の特色やアピールポイントなどを簡潔に記入して下さい	木下まち育て塾は、江戸期から明治期にかけ利根川水運で繁栄した木下地区を中心に、今ではやや元気のない、印西市の中心市街地である木下・六軒を「何とか元気にしたい」を掲げ、具体的には （1）往時の面影を今に伝える蔵・町屋の保存と活用 （2）地域への愛着と誇りを醸成する歴史の調査・研究、掘起こし （3）活性化へ繋ぐ市民ウォーク、市民公開講座等イベントの開催 等を行っている30代から70代の公務員、会社員、主婦等多様な市民からなる会員約25名、実働約10名の小さなまちづくり市民団体です。平成15年3月に結成、前身は平成13年10月、印西市主催による「木下まち育て塾」。平成14年8月、市主催の「木下まち育て塾」解散後、有志が「志」と「名」を継承し、現在に至る。本年は結成10年、節目の年となりました。 今では、東京電機大学、塾生及び市民が協働により修復・再生した「吉岡まちかど博物館」（旧吉岡家土蔵・明治24年建設）を拠点に活動しています。ここでは、吉岡まちかど博物館の完全修復に至る道程を中心に、まちづくり活動10年の一端を紹介します。
応募団体の名称・住所等	名　称：木下まち育て塾 代表者：伊藤　哲之
	〒270－1326　千葉県印西市木下1439番地 TEL:0476-42-8077　FAX:同左
	MAIL: machijuku@gmail.com URL:　kioroshimachijuku.web.fc2.com/　　facebook:ja-jp.facebook.com/kioroshimachijuku
連絡窓口・担当者 連絡担当者には応募・選考に関する問い合わせをすることがありますので、連絡の取れる住所・電話番号・メールアドレス等を記入して下さい	連絡担当者氏名　　むらこし　ひろしげ 〒270-1356　千葉県印西市小倉台1-3-1-1106　村越　博茂
	所属・役職 木下まち育て塾　会計
推薦者 他薦の場合、推薦者の氏名・所属等を記入して下さい	氏名　＊ 所属　＊

木下（きおろし）・六軒を元気にしたい！

――小さなまちづくり市民団体の 10 年――



真野暁亭（1874～1934）
「下利根川木下河岸眺望図」

木下まち育て塾

千葉県印西市　木下・六軒地区

応募概要書

まちづくり活動の名称等 まちづくり活動のテーマやキャッチフレーズなどがあれば記入して下さい	木下（きおろし）・六軒を元気にしたい！ ――小さなまちづくり市民団体の10年――
まちづくり活動の概要 まちづくり活動の特色やアピールポイントなどを簡潔に記入して下さい	木下まち育て塾は、江戸期から明治期にかけ利根川水運で繁栄した木下地区を中心に、今ではやや元気のない、印西市の中心市街地である木下・六軒を「何とか元気にしたい」を掲げ、具体的には （1）往時の面影を今に伝える蔵・町屋の保存と活用 （2）地域への愛着と誇りを醸成する歴史の調査・研究、掘起こし （3）活性化へ繋ぐ市民ウォーク、市民公開講座等イベントの開催 等を行っている30代から70代の公務員、会社員、主婦等多様な市民からなる会員約25名、実働約10名の小さなまちづくり市民団体です。平成15年3月に結成、前身は平成13年10月、印西市主催による「木下まち育て塾」。平成14年8月、市主催の「木下まち育て塾」解散後、有志が「志」と「名」を継承し、現在に至る。本年は結成10年、節目の年となりました。 今では、東京電機大学、塾生及び市民が協働により修復・再生した「吉岡まちかど博物館」（旧吉岡家土蔵・明治24年建設）を拠点に活動しています。ここでは、吉岡まちかど博物館の完全修復に至る道程を中心に、まちづくり活動10年の一端を紹介します。
応募団体の名称・住所等	名　称：木下まち育て塾 代表者：伊藤　哲之
	〒270－1326　千葉県印西市木下1439番地 TEL:0476-42-8077　FAX:同左
	MAIL: machijuku@gmail.com URL:　kioroshimachijuku.web.fc2.com/　　facebook:ja-jp.facebook.com/kioroshimachijuku
連絡窓口・担当者 連絡担当者には応募・選考に関する問い合わせをすることがありますので、連絡の取れる住所・電話番号・メールアドレス等を記入して下さい	連絡担当者氏名　　むらこし　ひろしげ 〒270-1356　千葉県印西市小倉台1-3-1-1106　村越　博茂
	所属・役職 木下まち育て塾　会計
	TEL:0476-46-7374、（携帯）090-6715-6587　FAX:0476-46-7374
	E-mail:hiro-murakoshi@u01.gate01.com
推薦者 他薦の場合、推薦者の氏名・所属等を記入して下さい	氏名　＊ 所属　＊

伝統の食：木下せんべいその他、午前中には売り切れてしまう「団子」、戦前からの名物「うなぎ天ぷら」もあります。ご賞味あれ！

Ⅰ　印西市の概要

千葉県印西市は、千葉県北西部、東京都心から北東へ約40ｋｍ、成田国際空港から北西へ約15ｋｍに位置し、北は利根川を隔てて茨城県に接している。

市内は、利根川沿いの木下を中心とする旧市街地と千葉ニュータウンとして計画された市南部の新市街地とからなる首都圏近郊都市である。新旧両地区の間には首都圏有数の里山景観を見ることができる。

平成22年、隣接の本埜、印旛の両村と合併し、現在、約3万5千世帯、人口約9万3千人となっている。平成25年6月、『東洋経済』は、印西市が「住みよさランキング」日本一となったと報じた。昨年に続き2年連続である。（一市民として、実感はありませんが？！）

Ⅲ　木下・六軒の現状と課題

利根川河川改修により、木下河岸は大きく変貌を遂げ、役目を終えた。まちの中心は木下駅前、六軒(木下駅北西、県道千葉・竜ヶ崎線沿い)へと移動し、印西地域の中心市街地として賑わった。

その後、昭和40年代から開始された千葉ニュータウン計画の進展と共にまちの賑わいはニュータウン地域へ移り、更に続々と進出する大型商業施設の前に衰退していった。

印西市は上記に対応するため、「～歴史をつなぎ、街中をつなぎ、人々をつなぐ～　水の駅きおろし・歴史と文化の香る出会いの街」とすべく、平成17年3月、住民参加による『印西市中心市街地活性化基本計画』を策定した。木下・六軒に点在する蔵・町屋の保存・活用は活性化の一翼を担うものとして期待されている。

木下市街地と利根川

引札にみる吉岡問屋のにぎわい

活躍した木下の蒸気船　銚港丸

団体の来館者との交流
（吉岡まちかど博物館）

蔵・町屋巡りの案内もします

Ⅱ　木下河岸の歴史

利根川右岸に位置する木下は、江戸期から明治期にかけ、江戸（東京）と銚子、佐原、茨城県の北浦、霞ヶ浦といった下利根川流域を結ぶ交通結節点、また、鮮魚輸送の中継地として繁盛した。江戸期には三社詣出（鹿島神宮、香取神宮、息栖神社）が盛んになり、木下から年間1万7千人が乗船し、4千艘強もの川船が出船したという記録が残っている。

明治期になっても蒸気船就航により繁栄は続き、特に明治14年前期には旅館が14軒、半年間の泊客が約1万5千人あった。それを裏付けるように、当時の新聞は「木下には毎日、銚子への蒸気船が往復し、繁昌している」、「木下は印旛郡の戸数400戸にも満たない小さなまちだが大変繁昌している」と伝えている。その後、明治34年の成田鉄道木下駅開業、明治期末から大正期にかけての利根川河川改修により衰退を余儀なくされました。木下・六軒には今もなお往時の面影を伝える蔵・町屋が多く残されている。

Ⅳ　木下まち育て塾活動史（抄）

平成13年10月　印西市による木下まち育て塾始動
平成14年8月　イシイ電気まちかど博物館開館
平成14年11月　蔵・町屋巡りを行う。今に続く
平成15年3月　有志により木下まち育て塾を結成
平成15年10月　瀧田まちかど博物館開館
平成15年10月　武蔵屋まちかど博物館開館
平成16年10月　吉岡まちかど博物館、第一次修復工事が完了し、開館（東京電機大学と協働）
平成17年10月　二見屋まちかど博物館開館
平成19年10月　物流博物館、江東区中川船番所資料館との合同企画展の一環として「Ｋｉｏｒｏｓｈｉ（木下）の蒸気船　銚港丸」を開催
平成20年11月　武蔵屋まちかど博物館で「町屋寄席」を始める。今に続く
平成21年10月　印西短歌連盟と「追悼　鈴木元臣短歌展」を共催
平成23年10月　吉岡まちかど博物館、第二次修復工事が完了し、開館（30日）。企画展「川蒸気船銚港丸の誕生とその終焉」を開催。この日、市民歴史講座「寺子屋吉岡」を開講
平成24年4月　「寺子屋吉岡」が印西市との企画提案型協働事業になり、今に続く

吉岡まちかど博物館第一次修復工事と市民交流拠点への道程（平成 16 年～22 年）

Ⅰ　取り壊しが時間の問題であった吉岡家土蔵（印西市木下 1484）の保存・再生・活用の意義

①吉岡家は、江戸期、名主、河岸問屋を務め、明治期には郵便局長、戸長となり、更に、東京・銚子間の蒸気船経営を行う等、政治・経済の中心にいた。いわば、歴史的にみて木下の原点とでもいうべき家であり、吉岡家の歴史はそのまま木下の歴史であったこと。

②土蔵は明治 24 年（1891）竣工、利根川水運の要衝として繁栄した木下を伝える数少ない歴史的建造物であるが、早晩、取り壊される状況下にあった。しかし、この木下を象徴する吉岡家の土蔵の破壊は単なる一土蔵の破壊に止まらず、「木下の歴史と文化」、「愛着と誇り」、つまり今後の木下を考える上でアイデンティティーの喪失に繋がりかねないという意識があった。そして「吉岡家の土蔵」故に木下駅圏内に及ぼすその影響は極めて大きいものがあると考えていた。

③逆にこの土蔵の再生は、やや活気のない今の木下を元気にし、今後のまちづくりに必要な「愛着と誇り」を醸成するきっかけになり、更には木下駅圏に点在する蔵・町屋の保存・活用への道を開く魁になると考えていた。

Ⅱ　広範な協働による吉岡まちかど博物館の再生・活用、平成 16 年 10 月 24 日、ついにオープン

平成 16 年 5 月、吉岡家のご理解のもと、先ずは蔵内外の整理作業から開始し、同年 10 月 24 日、「吉岡まちかど博物館」として再生した。この第一次修復工事は、東京電機大学の滋賀教授指導のもと建築専攻の 1 年生を主体とするワークショップとして、学生を中心に、塾生と協働して行った。工事途中には、見るに見かねた地元の大工、左官の方も飛び入り参加し、学生を指導した。修復工事は、千葉日報が報じ、ＮＨＫの首都圏ネットワークにも放映された。

Ⅲ　安心・安全確保に向け、継続実施した補強工事

平成 17 年 8 月から 9 月にかけ、北側及び東側下見板の製作、取付工事を電大生中心に、塾生と協働して実施。平成 18 年 1 月、目に余る白蟻被害の放置は危険と判断し、塾生により梁、柱補強工事を実施。更に同年 8 月、周囲より一段低い近世地盤面に立つ吉岡まちかど博物館の排水機能を改善すべく塾生により排水工事を実施、以後、前庭から雨水の滞水は見られなくなった。

平成 21 年 10 月、開館 5 周年記念企画展「追悼　鈴木元臣短歌展」に向け、パネル（穴あきボード）設置工事を実施、館内もようやく博物館らしくなる。

Ⅳ　企画展：平成 16 年 10 月の開館後、月 1 回の定期開館の他、市内外の市民及び市民団体に向け、木下河岸の歴史、明治期の歴史空間としての魅力を伝えるべく、下段の企画展を実施してきた。

平成 19 年 10 月、一市民団体である木下まち育て塾（吉岡まちかど博物館）、日本通運の企業博物館である物流博物館（東京都港区）及び江東区中川船番所資料館とが「川蒸気船」をテーマに協働し、三館合同企画展「川の上の近代、川蒸気船とその時代」を共催したことは特筆できる。遠く、横浜、川崎、立川等からの来館者があった。企画展準備のため、物流博物館から博物館実習生 4 名の支援を受けた他、ＮＨＫＦＭ千葉の番組に会長他が出演する等暖かい支援を受けた。

・平成 16 年 10 月　「吉岡まちかど博物館開館記念―愛着と誇りの木下―」（記念誌刊行）
・平成 19 年 10 月　「Ｋｉｏｒｏｓｈｉ（木下）の蒸気船、銚港丸」（図録刊行）
・平成 21 年 10 月　「追悼　鈴木元臣短歌展」（印西短歌連盟と共催）（記念誌刊行）
・平成 22 年　3 月　「写真で見る印旛高等学校 100 年の軌跡」

Ⅴ　活用した主な助成金：図録刊行、ショーケース等館内備品購入、排水工事にあたり次の団体から支援を受けた。①印西市市民活動助成金　②（株）千葉ニュータウンセンター　いきいきラーバン活動助成　③日本財団　海と船の企画展

矜持を失いかけていた修復工事着手前の吉岡家土蔵

危険、立入禁止の入口

さあー準備開始！

誇り高き二階の窓

修復工事始まる、そして待望の開館、市民交流拠点へと再生

始まった修復工事

電大女子学生の活躍

扉の調整をする塾生

工事完了に歓喜の電大生

まちかど博物館誕生

待望のテープカット

安全・安心確保のため継続実施した補強工事／企画展・市民交流

前庭の排水工事始まる

梁材を用意する塾生

梁の補強工事進む

来館した市民の皆さん

博物館実習生来たる

短歌展会場となる

始まった修復工事

第二次修復工事・寺子屋吉岡の開講（平成22年12月～現在）

Ⅰ　第一次修復工事後の課題

吉岡まちかど博物館は、平成17年5月からは毎月1回の定期開館を行ない、市内外から多くの市民、公民の団体が来館した。しかし、吉岡まちかど博物館には次の課題があった。

(1) 老朽化の進む吉岡まちかど博物館の更なる安心・安全の確保(白蟻被害が目立ってきた)

(2) 木下河岸歴史博物館及び市民交流拠点としての長期的活用

検討の結果、吉岡まちかど博物館を木下河岸の歴史を後世に伝える歴史的建造物として、保存・活用を図ることとした。外観の景観維持を図り、かつ建物の安全性・延命化を考慮すべく、内部を中心とした補修の実施により、建物の強度を確保し、今後の活用に耐えうるものとした。設計は塾生（一級建築士）が行った。

Ⅱ　平成22年12月、木材伐採による第二次修復工事の開始と平成23年10月30日、完全修復による開館

第二次修復工事は塾の単独事業とし、財源は「公益信託印西市まちづくりファンド」（500万円）を活用した。修復に用いる木材は吉岡家分家（二見屋）から提供の申し出があり、市内の山林から杉、さわら等20本程度を伐採した。平成23年3月11日、東日本大地震、吉岡まちかど博物館も壁の一部崩落、瓦のずれ等大きな被害を受ける。しかし、第一次修復工事のお蔭で倒壊を免れ、3月下旬には工事を再開した。財源不足が見込まれ、伐採時の枝刈取り作業、下見板撤去、ごみ処理等は全て塾生が行う。

8月にはほぼ、工事が終わり、木下に白亜の蔵が出現した。一方、軌を一にするように隣接の母屋が解体され、アパートが建設された。10月30日、完全修復なった吉岡まちかど博物館前庭で吉岡家の方々、山崎市長、千葉大福川教授等来賓の方々と開館式を挙行した。白亜の蔵として甦った吉岡まちかど博物館、市による木下まち育て塾発足の平成13年当時、10年後のこの日の姿を誰が予測しえたであろうか。木下まち育て塾の当面の大きな目標が達成された瞬間であった。

なお、修復後は月2回の定期開館とした。平成23年度、吉岡まちかど博物館来館者416名（387名）、その他事業参加者150名（158名）、活動参加塾生延べ380名（252名）に及んでいる。（　）は24年度。

Ⅲ　塾生を講師とする市民歴史講座「寺子屋吉岡」の開講

開館式当日の午後、完全修復なった吉岡まちかど博物館2階に於いて、市民歴史講座「寺子屋吉岡」（全5回）を開講した。市内外から10名の受講生が集まった。講師は全て地域史を研究する塾生である。塾生自らが修復した吉岡まちかど博物館で木下河岸等の歴史を市民と共に学ぶ、この試みこそ、「歴史と文化を活かしたまちづくり」を掲げる木下まち育て塾の活動が一つの到達点に達した瞬間でもあった。

寺子屋吉岡は平成24年度以降、企画提案型協働事業「印西市木下地区歴史講座」として、印西市との共催事業として定着し、既に60名を超す市民に「修了証」を交付した。寺子屋吉岡は地域と共に歩んだ歴史的空間の中で地域の歴史を市民と共に学ぶという歴史的建造物の保存・活用事例として注目を集めている。講義に用いるプロジェクター、黒板等備品は「パルシステム千葉NPO助成基金」を活用した。

Ⅳ　歴史的環境整備事業（コミュニティボード設置工事）

吉岡まちかど博物館南側の母屋（大正元年築）跡には平成23年秋、2階建てアパートが新築された。遮蔽物がなく、違和感があった。平成24年1月に設計着手、5月、工事の本格開始、8月には無事完成した。木材は修復工事の残材を、財源は「公益信託 大成建設自然・歴史環境基金」を活用した。

大型の展示板は、吉岡まちかど博物館の歴史的環境を維持すると共に、来館する市民への情報提供を行うコミュニティボードともいえるものであり、ベンチに座り、ボード見つめる市民の姿が見られる。

第二次修復工事始まる。それは、市内山林から杉等を伐採することから始まった

伐採木の選別をする塾生

伐採前、山の神に祈りを！

伐採補助をする塾生達

足場を組み、下見板を撤去する

鳥籠状に補強、安心だ！

白亜の土蔵、ついに現る

木下河岸の歴史を学ぶ、市民歴史講座「寺子屋吉岡」/竣工記念企画展が始まる

寺子屋吉岡を受講する市民

寺子屋生、課程を修了す

1階で同時開催の企画展
鉄舟書「銚港丸」が見える

吉岡まちかど博物館、歴史的環境整備事業

工事開始。ベンチが完成し、掲示板の支柱が立ち始めた。画面右はアパート、上方は駐車場である

完成した掲示板、遮蔽効果もある。第一段の歴史的環境整備事業は終了した

新規作成の看板

蔵・町屋の保存・再生、活性化イベント、他団体との連携紹介

これまで、吉岡まちかど博物館再生史を中心に見てきた。ここでは（1）所有者の方の深いご理解により開館したまちかど博物館４館（2）武蔵屋「町屋寄席」（3）活性化イベント・他団体等との交流（4）地域史研究の企画展に係る図録刊行等、その他の活動を紹介する。

Ⅰ　蔵・町屋の保存・活用：まちかど博物館館紹介

市民祭りと連携し、秋に一斉開館した他、市内外の市民の方々に往時の繁栄をとどめる歴史的空間、利根川、木下河岸跡の水辺を塾生の案内により堪能していただいている。

繭の集荷所として使用していた写真がある。木下まち育て塾が最初に開館したまちかど博物館、平成 14 年 8 月開館

イシイ電気まちかど博物館（六軒・大正 6 年建設）

タバコと塩の博物館の異称をもつ。渋谷の本家本元が時々、史料を借りにくる程。平成 14 年 10 月開館

瀧田まちかど博物館（六軒・明治 40 年頃建設）

利根川縁で旅館業を営む。大正 3 年、河川改修により現地に移転。平成 19 年、印西市初の国登録有形文化財となる。平成 15 年 10 月開館

武蔵屋まちかど博物館（木下・江戸後期頃建設）

往時は玩具、文房具、本屋等を営み、木下の文化の窓口。屋号は富士山と筑波山が見えることにちなむ。平成 17 年 10 月開館

二見屋まちかど博物館（木下・明治 8 年建設）

武蔵屋まちかど博物館の「町屋寄席」

地元、印西市在住、落語界の若きホープ金原亭馬治さんを招き、平成 20 年以来続く町屋寄席。地域が若手落語家を育てている。明治 11 年（1878）、旅館業を営んでいた武蔵屋、建築時期は更に遡る。130 年以上は経過した歴史的空間で聞く落語は格別だ。今や、晩秋の夕べを飾る木下の恒例行事となった。塾生も大がかりな会場設営に汗をかいている。今年も旅館の名残りを留める幅広の階段に腰を下ろす市民(下中：画面右上)が見られることであろう。

熱演する金原亭馬治さん

毎年、満員御礼の武蔵屋

宴後の、馬治さんと市民

Ⅱ　活性化イベント・企画展・研究報告・市民交流・地元木下小との交流

大学、地元市民団体、歴史研究団体等と協働して市民交流イベントを開催してきた。

上左：共催した市民公開歴史講座で木下の蔵・町屋を報告する東京電機大学生（於：中央公民館）
上右：吉岡まちかど博物館に来館した木下小児童を案内する女子塾生

下左：企画展と協働して例会を木下で開催した利根川文化研究会会員に説明中の塾生（於：木下河岸跡）
下右：木下駅新駅完成を記念して開催した企画展「成田線史とよもやま話」（於：中央公民館）

Ⅲ　地域史研究等と成果の還元

まちづくりは地域への「愛着と誇り」なしには成立しない。先ずは先人の遺した地域の歴史を知り、更には掘り起し、未だ眠っている歴史に光をあてることである。

この 10 年間、6 回の企画展を実施し、図録、記念誌として 6 冊刊行し、地域に還元してきた。その他、毎年度塾の機関紙「まち育て便り」を出している。

『成田線史とよもやま話』
平成 20 年

『吉岡まちかど博物館開館記念』
平成 16 年

『Ｋｉｏｒｏｓｈｉ（木下）の蒸気船銚港丸』平成 19 年

『吉岡まちかど博物館（旧吉岡家土蔵）改修記録』平成 23 年

『川蒸気船銚港丸の誕生とその終焉』
平成 23 年

課題と展望：吉岡まちかど博物館は、木下河岸の変遷を見つめ続け、更にはまちづくり市民活動 10 年の舞台としての歴史をも刻み始めている。今後は、木下河岸歴史博物館、また、木下を代表する市民交流拠点として更なる活用が望まれている。しかしながら、将来を見据えた大規模修繕の財源確保、次世代への引継ぎ等課題は多い。（畢）